

A-5

シイタケ菌床栽培における樹種の影響について

◎山内 隆弘, 寺内 健, 枝 克昌, 鮎澤 澄夫
(株式会社 北研・食用菌類研究所)

Effects of tree species on Sawdust-based cultivation of *Lentinula edodes*.

◎Takahiro YAMAUCHI, Ken TERAUCHI, Katsumasa EDA, and Sumio AYUSAWA (Edible Mushrooms Inst., Hokken Co., Ltd.)

[目的]

シイタケ菌床栽培において、オガコやチップはシイタケ菌糸が分解して栄養分を得る主原料であるが、原木となる樹種により各種成分の含有量と質などが異なるため、使用するオガコ樹種が栽培の安定化において非常に大きなウエートを占めている。演者らは1997年に開催された日本応用きのこ学会第1回大会において5種類のオガコを用いた通常栽培(注:菌床6面体全面より発生させる方法)を行い、樹種の違いが培養の仕上がりや発生パターンなどに大きな影響を及ぼすことを報告した¹⁾。今回、演者らは日本において流通量が多いコナラおよびシイの2樹種を対象とした上面栽培(注:菌床上面のみから発生させる方法)を試み、興味深い知見を得たので報告する。

[方法]

コナラおよびシイのチップ(7mm角)および細オガコを容量比8:2で混合し、これに栄養体を添加、水分調整後、常法により菌床を作製した²⁾。つづいて北研600号および607号を接種後、所定期間培養し、上面栽培³⁾による比較検討を行った。発生は温湿度管理を基本としたが、一部の試験群では上面浸水処理を行った。

[結果および考察]

600号では培養日数に関わらずシイ群において比較的早期から子実体の発生が認められたが、コナラ群では発生が遅れ収量が伸びにくい傾向があり、最終収量がシイ群と比較して200~300g程度減少した。しかしながら、温湿度管理に加え積極的に上面浸水処理を行うことにより最終的にシイ群と同等程度の収量を得ることが可能であった。

607号においても600号と同様の傾向が認められたが、200日間の発生管理における最終収量の相違は小さかった。

以上の検討により、促成栽培型の上面栽培では、培養日数に関わらず、樹種により発生パターンや収量に相違が認められた。コナラ群では品種を問わず、温湿度管理のみでは早期の発生が遅れる傾向があり、短期栽培では積極的な芽出し処理を行う必要性が高いと考えられる。

1) 枝, 他: 日本応用きのこ学会第1回大会講演要旨集 58P (1997)

2) 北研食用菌類研究所編: 菌床シイタケの作り方, 農山漁村文化協会 (1993)

3) 特許 3087171: しいたけ菌床の発生方法